

黒島傳治全集

III

黒島 傳治 全集

III

筑摩書房

黒島傳治全集 第三卷

昭和四十五年八月三十日 第一刷発行

著者 黒島傳治

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二の八  
郵便番号 一〇一―一九一  
振替東京 四一―二二三  
電話東京(二九一) 七六五一(代表)  
印刷・明和印刷 製本・和田製本

© 黒島 1970

(分類)0393 (製品)71503 (出版社)4604

黒島傳治全集Ⅲ 目次

長篇小説

武装せる市街…………… 3

評論

農民文学漫筆…………… 117

戦争について…………… 118

反戦文学論…………… 119

彼等の偽瞞の面皮を引きはごう…………… 132

我々は新段階へ進まねばならぬ…………… 140

入営する青年たちは何をなすべきか…………… 143

農民文学の問題…………… 146

農民文学の正しき進展のために…………… 150

親分子分グループの行方…………… 153

農民文学の発展……………	155
「聞く文学」「聞かせる文学」……………	158
明治の戦争文学……………	161
小林多喜二の芸術の基調……………	172
無題……………	174
作家と模倣……………	175
詩に於ける思想……………	177
感想・随筆・ルポ（付・詩一篇）	
小豆島……………	183
選挙漫談……………	184
入宮前後……………	187
髪を掴んで……………	190

『地獄』	190
葉山嘉樹の芸術	191
『施療室にて』	195
正直な批評には	197
一月一日	198
野田争議敗戦まで	198
私の十年前の回顧・十年後の予想	203
『史的一元論』	203
武器	204
ダンス	206
有形無形の犠牲	208
材料について	208
明治大正期の天才	210

愛読した本と作家から……………	210
歙と鎌の五月……………	212
支那見聞記……………	215
僕の文学的経歴……………	217
奉天市街を歩く……………	219
白鳥と藤村……………	221
今野大力の思い出……………	223
海賊と遍路……………	225
最も印象の深かった今年作品……………	227
田舎から東京を見る……………	227
外米と農民……………	229
短命長命……………	232
四季とその折々……………	234



作家の信条……………235

自画像……………236

自伝……………238

過去帖……………239

野田争議の実状……………240

五月祭の農民……………244

軍隊日記（付・創作ノオト）

除隊の日まで……………247

星の下を……………310

創作ノオト……………326

書簡

大正十年	333
大正十二年	334
大正十三年	340
昭和四年	343
昭和五年	344
昭和九年	345
昭和十年	352
昭和十一年	356
昭和十二年	357
昭和十三年	362
昭和十四年	365
昭和十五年	373
昭和十六年	375

昭和十七年	377
昭和十八年	378
黒島傳治年譜（戎居士郎）	381
回想の黒島傳治（壺井繁治）	397
解説（小田切秀雄）	407

長篇 武装せる市街



五六台の一輪車が追手に帆をあげた。

そして、貧民窟を横ぎった。塵埃の色をした苦力が一台に一人ずつそれを押していた。たった一本しかない一輪車の車軸は、巨大な麻袋の重みを一身に引き受けて苦しげに咽びうめいた。貧民窟の向う側は、青い瓦の支那兵営だ。一輪車は菱形の帆をふくらましたまゝ貧民窟から、その兵営の土煉瓦のかけへかかれて行った。帆かけは見えなくなった。だが、車軸はいつまでも遠くで呻吟を、つぶけていた。

貧民窟の掘立小屋の高梁稗の風よけのかけでは、用便をする子供が、孟子も幼年時代には、かくしたであろうと思われるようなしやがみ方をして、出た糞を細い棒切でいじくっていた。

紙ぎれ、ボロぎれ、糞屑、玻璃のかけらなど、——そんなものゝ堆積がそこらじゅう一面にちらばっていた。纏足の女房は、小盗市場の古びた骨董のようだ。顔のへしやげた苦力は、塵芥や、南京豆の殻や、西瓜の嚙りかすを、ひもじげにかきさがしつゝ突ついていた、彼等は人蔘の尻尾でも萎れた菜っぱでも大根の切屑でも、食えそうなものは、なんでも拾い出してそれを喰った。

一輪車が咽ぶその反対の方向では、白楊の丸太を喰うマツチ工場の機械鋸が骨を削るようにいがり立てた。——青

黒い支那兵営の中から四五人の白露兵が歩き出して来た。

「要不要？」

客を求める洋車の群が、どこからか、白露兵の周囲にまぶれついた。苦力のズボンの尻はフゴクしていった。彼等は、自分だけさきに客を取ろうと口やかましく争った。

「要不要？」

ロシア人は、洋車を群に見むきもせず、長い脚でのしのと歩いてきた。

彼等は、昔、本国から極東へ逃げ、シベリアから支那へ落ちのびて来た。着のみのまゝの彼等の服装は、もう着破って、バンド一条さえ残っていなかった。が、彼等は、金がなくても、どこからか、十年前の趣味に合致した服や外套を手に入れてきた。汚れた黒い毛皮のコサック帽も、革の長靴も、腰がだぶつき、膝がしまっている青鼠のズボンも、昔に変らぬものを、彼等は、はいていた。

頭も肩も、低い支那人から遙かに高く聳えていた。

「今月は、いくら月給を貰ったい？」

支那服の大褂児の男が、彼等と並んで歩き乍ら、話しかけていた。これは山崎である。

「一文も貰わねえや。」

「先月は、いくら貰ったい？」

「先月だって、一文も貰わねえや。」

「先々月は？」

「先々月だって一文も貰わねえや。」

「ひっぱりたいたれ！」支那服の山崎は声をひそめた。「かまうもんか、ひっぱりたいたれ！ あの大男の張宗昌のぶくぶく肥っている頬ツベたをびしゃりとやつたれよ。」

白露兵は、ふいに、愉快げに上を向いて笑いだした。

彼等は、頭領のミルクロフが、張宗昌に身売りをした、そのあとについて、山東軍に買われて来た。いつも、せいの低い、支那馬にまたがり、靴を地上にひきずりそうにして、あぶない第一線ばかりに立たせられた。ある者は、戦線で、弾丸にあたつて斃れてしまった。ある者は、びっこになり、片目になり、腕をなくして追っぱらわれた。ある者は、支那人の大蒜の匂いに愛想をつかして逃亡した。仲の悪い支那兵と大喧嘩をした。

彼等が戦線からロシヤパーに帰つて来る時、皮下の肉体にまで、なまぐさい血と煙硝の匂いがしみこんでいた。

「畜生！ 女郎屋のお上に、唇を喰いちぎられそなた張宗昌が何だい！ 妾ばっかし二十七人も持つてやがって！……かまうもんか。ひっぱりたいやれ！」

白露兵は、なお嬉しげに上を向いて笑った。

彼等の眼のさきの、マッチ工場のトタン塀に添うて、並んでいるアカシヤは、初々しい春の芽を吹きかけていた。

そのなお上には、街の空を、小さい鳥が横腹に夕陽を浴びて、嬉しげに群れとんでいた。

工場は、塵埃と、硫黄と、燐、松脂などの焦げる匂いに白紫ずんでいぶっていた。

少年工と少女工が、作業台に並んで、手品師の如く素早く頭付軸木を黄色の小函に詰めている。「函詰」では、牛を追う舌打ちのように気ぜわしい音響が絶えず連続して起っている。全く歯の根がゆるむような気ぜわしさだった。

乾燥室から運ばれる頭付軸木を手ごころで一定の分量だけ掴んで小函の抽斗に詰め、レットルを貼つた外函にさすそれを、手を打ち合あす、拍手のような動作のように、一瞬に一箇ずつ、チャツ、チャツとやつてのけた。七つか八つの遊びざかりの少年や少女も營々と氣ばっている。

支那人は、小さい子供は籠に担い、少しおおきいのは、歩かして、街へ子供を売りにくる。それを七元か、十元で買い取つた者が半分まじっていた。幼年工もあつた。おさなくつて、せいがひくいので、その子供達は、ほかの男女工達と同列の椅子に腰かけては、作業台に手が届かなかつた。床に盆を置いて貰つて、その上へ小さな机子（腰かけ）を置き、そこへ腰かけて、小ツちやい、可愛らしい手で、ツメこんでいた。

彼等は、みな、灰黄色の、土のような顔になっていた。燐寸の自然発火と、外函の両側に膠着された硝子粉のため、焼き爛らした指頭には、黒い垢じみた綿帯を巻いていた。

作業にかゝると休憩まで、彼女達と彼等は、用事上で喋ることも、雑談することも禁じられていた。彼等は、六時

間を、たゞ、啞の小ロボットのようになり、手を動かすばかりで過すのだった。

時々シユツといたり、シャツといたりする。黄燐マツチが、自然と摩擦して一刹那に発火する音響だ。その時、子供達は、指を焼くのだった。同時に、よこれた彼等は、ユラ／＼と立上る薄紫の煙に姿がボカされた。

一人として、一言も発する者がなかった。が、そこには、騒々しい雑音と、軋音が、気狂いのように溢れていた。

幹太郎は、その工場をぐる／＼まわり歩いていた。

彼も、鞭と拳銃を持っていくことになっていた。彼の下には、支那人の把頭がついていた。把頭も木の棒を持っていた。その木の棒は、相手かまわず、ブン殴っても、軟らかい手や脚を叩き折ってもかまわないことになっていた。しかし、日本人と把頭の前では、ちり／＼して勤勉振りを示そうとつとめる工人達には棒も拳銃も更に必要がなかった。

彼は今年二十五歳の青年だった。ひどく気むずかしやで、支那人をよりよく働かせることが嫌いなような、監督振りがまらずい、理窟ッぽい男だった。

塵埃と共に黄燐を含んだ有毒瓦斯は、少年達へと同様に、彼の肺臓へも、どん／＼侵入して来た。

——君は、一体、支那人かね。それとも日本人かね？

最近、瑞典マツチの圧迫を受けてぶり／＼している不機嫌な支配人は、彼がむしろ支那人に肩を持つ癖があるのを責

めて、皮肉な辛辣な眼つきをした。

幹太郎は、親爺が、とうとうへ口嚙者となつてしまった。それと、これを思い合わして淋しげな顔をした。日本人はへ口を売ってもかまわない。しかし、支那人の如くへ口を吸ってはいけない。そのへ口を親爺は、支那人の如く吸飲した。支那人の如く嚙者となつてしまった。

「俺れらは、日本人仲間からも嫌われているんだ、どうも、追ツつけ、俺れも、この工場からお払箱か……」

実際、幹太郎は、すれツからしの日本人よりも、支那人に対して親しみが持てた。又、工人達も、彼に対して、ほかの小山や守田に対するよりも、親しく、ざつ／＼ばらんであるように見えた。

「お前あといくつだい？」

軸削機をがち／＼／＼ならして、木枠に軸木を並べている房鴻吉に、彼は、なでるように笑つてみせた。房の頭は、ホコリで白くなつていた。平べったい鼻の下には、よこれた大きい黄色い歯が、にやりとしていた。

「あといくつだい？」

「三ツ、三ツ」房は、あたふたと答えた。榨台車に三台のことだ。

「早くやれ。」

「すぐ、すぐ。」

房は小さい軸木を林のように一面に植えつけた木枠に止



め金をあてがった。ピシン／＼とつまった音がした。

幹太郎は、そこから、浸点作業へ通り抜けた。焼くような甘味のある燐の匂いが、硫黄や、松脂ともつれあつて、鼻をく／＼さした。

開け放された裏の出入口からは、機械鋸と軸素地剝機が、歯を削るように、ギリ／＼唸っていた。生の軸木を掌にとつてしらべていた小山は、唾を吐くように、吠にポイと投げて汚れた廊下をかえつてきた。

「君、于の奴をどう思うね？」

幹太郎の受持の、常から頭の下げっ振りが悪い変骨の于立嶺を指しているのは分っていた。

「どうも思いません。」

「あいつの仕事は、いつもおお、おお、だから、浸点で屑が出来ること知つとるだろうね？」

「そうでもありませんよ。」

「君の眼に、屑でも屑でないと見えるんならそれでもいいさ。」

あんまりしつこく支那人の肩を持っていると、邪推されるのは癪だが、小山と一緒に自分の受持の者を悪く云うのは、なお更、自分が許さなかった。軸列と、浸点と、乾燥室は幹太郎の受持になっていた。

「あんな奴を放つて置いちや、北伐軍でもやって来た日にな、手がつけられなくなつちまうんだ！」

小山は傷つけられたものを鼻のさきに出して鳴らした。

小山がむきになると、幹太郎は、ワザと、于の尻を押してみたい気持を感じるのだった。小山は、下顎骨が燐の毒で腐り、その上、胸を侵され、胸で咳をしていた。于は、人を小馬鹿にしたような、フーンと小鼻を突き出したりする支那人ではあつた。

彼等は歩いた。

「暖呀！」

その時、小函を一打ずつ紙に包み、更に大きい木箱に詰めている包装で、ふいに、シューツシューツと空気を斬る音響が起つた。

仲間の工人から、工場での美人とされている、しかし、日本人が見ると、どうしても美しいとは思われない、平たい顔の紅月我がびつくりして身を引いた。脚が弱々しく細かった。木箱の中のマツチが、すれて、発火してしまつたのだ。紫黒の煙が、六百打詰の木箱から、四方へ、大砲を打つたように、ばあツとひろがった。煙に取りまかれた紅月我は、指を焼いたらしつた。

小山は、骨ばつた手を口にあて、煙にむせながら、こつちから、じろりと眼をやつた。焼いた手を痛そうに、他の手で押えながら顔をあげて、ぐるりをはゞかるように見た。紅は、小山の視線に出会すと、すぐ、まだ煙が出ている木箱の方へ眼を伏せた。

幹太郎は、小山の下顎骨の落ちこんだ口元が、苦しげに歪むのを見た。紅は、なお気がかりらしく、今度は恐る